

今回のお題は、おなじみ李白の七言絶句、『越中懐古』(別名『越中覧古』)と『蘇台覧古』でした。共に『唐詩選』にも載っている非常に有名な作品です。この二首は組詩とも言えるもので、呉越の戦いを題材に、呉越双方の視点から、いずれも過去と現在を巧みに交錯させながら歌い上げています。

呉越が互いに興亡を繰り返したのは春秋時代、孔子(前552～前479)が生きた時代とほぼ重なります。孔子の死から数年後、紀元前473年に呉王の夫差が越王勾踐に破れ、呉は滅亡します。

唐の時代の李白(701～762)からすれば、呉と越がしのぎを削った時代は、つわものどもが夢の跡、遙か昔の物語なのです。呉と越の戦いは、人口に膾炙した「呉越同舟」や「臥薪嘗胆」などの四字熟語とともに壮大な歴史ドラマを生みました。

絶世の美女西施や、呉王の重臣伍子胥と越王の軍師范蠡らが繰り広げた歴史絵巻は、後世さまざまな尾鰭をつけて語り継がれ、伝統劇や映画、テレビドラマ等の題材にもなっています。伍子胥は賢臣でありながら、最期は夫差に疎まれ自害します。もし、夫差が伍子胥の諫言に従い、捕虜となった越王の息の根を止めていたら、呉が亡びることもなかったでしょう。

復讐の鬼としても知られる伍子胥の残した名言「死者に鞭打つ」「日暮れて道遠し」は日本でも慣用句としてしばしば使われます。また越王に仕えた軍師范蠡は、自分の献策によって越が勝利した後、奢り高ぶる勾踐を見限り、「狡兎死して走狗烹らる」の名言を残して越を逃れます。「この范蠡は船で斉の国に渡り、マネービルディングで巨万の富を得たと言われているのですが、これも本当かどうか分かりません」と植田先生。史実は全く違ったかもしれませんが、私の好きな陳舜臣さんの『小説十八史略』では呉の宮殿から密かに救い出した西施を伴って斉に逃れ、大

資産家になった。しかし、こんな最高の人生などあり得ないと、范蠡を架空の人物だという説を唱えている人がいるが、完全な架空の人物ではないにしても、色々な人物の良い方の業績が彼の名のもとに集められた可能性はある、と書いています。

さて、李白は数え年25歳の時、故郷の四川を離れ、都長安を目指す旅に出て長江を下ります。仙人に憧れていた李白は道中、様々な人々と出会い、色々な経験をしたようです。各地を転々としたあと、長安に辿り着き、玄宗皇帝に気に入られ、宮廷詩人として活躍しますが、2年足らずで追放され、再び流浪の旅に出ます。その旅の途中で訪れたのが呉楚の地です。

まず『蘇台覧古』から。

sū tái lǎn gǔ lǐ bái  
蘇 台 覧 古 李 白  
jiù yuàn huāng tái yáng liǔ xīn  
旧 苑 荒 台 楊 柳 新  
líng gē qīng chàng bù shèng chūn  
菱 歌 清 唱 不 勝 春  
zhī jīn wéi yǒu xī jiāng yuè  
只 今 唯 有 西 江 月  
céng zhào wú wáng gōng lǐ rén  
曾 照 吳 王 宮 里 人

きゅうえん こう だいやうりゅうあら  
旧苑荒台楊柳新たなり。

りょう か せいしゅうはる た  
菱歌清唱春に勝えず。

ただいまただせいこう  
只今惟西江の月のみ有り。

かつ ご おうきゅうり  
曾て照らす吳王宮裏の人

次いで『越中懐古』。

yuè zhōng huái gǔ  
越 中 懐 古  
yuè wáng gōu jiàn pò wú guī  
越 王 勾 踐 破 吳 归  
yì shì huán jiā jìn jīn yī  
义 士 还 家 尽 锦 衣  
gōng nǚ rú huā mǎn chūn diàn  
宫 女 如 花 满 春 殿  
zhī jīn wéi yǒu zhè gū fēi  
只 今 唯 有 鸕 鶒 飞

えつおう こう せん

越王句踐呉を破りて帰る

義士は家に還るに 尽 く 錦衣

宮女は花の如く 春殿に満つるも

ただ いまだ しゃ こ

只今惟鷓鴣の飛ぶ有るのみ

この二首は一説には、長安に至る前の726年に『越中懐古』を、727年に『蘇台覽古』を作ったと言われています。また、追放された後の作品だとする説もあるようです。はっきりしたことはよくわかりません。

まず『蘇台覽古』から意味をみてみましょう。「旧苑荒台」とは、荒れ果てた呉の宮殿跡を指します。昔の王宮の遺構に、新たな柳の目が出て、ゆらゆらと風に揺られている様子が目に浮かびます。「菱歌清唱」とは、菱の実を摘む若い娘たちの清々しい歌声が聞こえてくることです。「春に勝えない」とは、春の感傷に耐えないということか。なんとなく悩ましげに響きます。起句は視覚から入り、二句目は聴覚で承けます。この対照がさりげなく、しかも実に見事です。

「西江」とは、蘇州の西を流れる長江のことか、蘇州城内を縦横に流れる川の一つかもしれませんが、今、李白の目の前にある川面を照らす月の姿が見えるようです。その月はまたかつて呉の王宮の美女たちを照らした月でもあります。なお、この「西江月」という言葉は、後に楽曲の名称となり、多くの人に時代を超えて歌い継がれました。「呉王宮裏の人」とは、華やかに着飾った宮廷の女性たちの姿、あるいは呉王夫差の愛妃であった西施のことか。西施は、呉王夫差を籠絡するために范蠡が送り込んだ絶世の美女と伝えられています。呉王はその策略にかかって治世をおろそかにし、その結果、呉が滅亡したということになっています。

さて、「春に勝えず」という言い方ですが、これは李白の前にも使われたことがあるそうです。「この〈不胜春〉は李白の造語ではありませんね。でもとて

も新鮮な響きを感じます。どうも李白はパクったようなんですが、元の詩はパツとしなくても、李白が使うとこれがまた恐ろしく目立つんですね。今は著作権とかケチなこと言いますが、昔は良いものは良い！ って感じだったんでしょかね。」と植田先生。「春に勝えない」とは、意味がはっきりせず、諸説あるようですが、恐らく、春の感傷に耐えられない、何となく悩ましくてたまらないなあ、という気分のようなのです。けなげに働く少女たちの澄み切った素朴な歌声に耳を傾ける李白の姿が目には浮かびます。もっと遡れば、「楚辞」にも既に「春を傷む」という表現が出てくるそうです。

「日本人は秋になると何となく感傷的になりますが、中国人は春に感傷的になるようですね。〈傷春〉や〈惜春〉は女性的イメージで、漢詩の中によく出てきます。愛する人と別れた女性の悲しみを表します。あつという間に過ぎていく春に女性の一番美しい時を重ねていたのでしょうか。昔は人生五十年ですからね、四十で老人ですよ。私は二倍生きましたけどね」と植田先生が仰ったので、苦笑いがあちこちに渦巻いたようです。アラフォー女子も「四十は老人！」に心中ガーンとショックを受けておりました。しかも、もうすぐ五十に手が届きそうなのだから、そろそろ死期を感じる年だったんですね。私の周りの素敵なお姉様方からは、「女は五十からが面白いのよ。」なんて聞きますが、この時代の女性達は本当に気の毒だったと思います。だって、女性は何歳になっても綺麗でいたいし、愛されたいですからね(笑)。

また、「傷春」に対して、「悲秋」という言葉がありますが、こちらの方はもっぱら男性のイメージで、戦争や刑罰、厳しい人生を連想するそうです。男性にとっては容貌の衰えより、自身の活躍を阻まれたり、成長や目標への努力が報われないまま空しく年が過ぎていく悲しみの方が大きかったのでしょうか。

さて、三句目の「只今惟西江の月のみ有り」は、作者の心の中で現在と過去が交錯するところです。「この現在と過去の対比が実に見事です。現在と過

去との交錯と言えば、素朴な少女たちの歌声と艶やかに舞い乱れる宮女たちとの対比に、その伏線が見られます。ところで李白は歴史をロマンチックに歌い上げるのが得意ですね。杜甫は歴史を厳しい目でみえています。歴史は教訓として捉えるのと、ロマンとして捉えるのと両方ありますが、日本人はどうやらロマンとして捉えるのが好きですね。だから、日本人はどちらかという李白が好きですね。尊敬できるかどうかは別として……。杜甫は〈詩聖〉と呼ばれるだけあって、好き嫌いよりも、尊敬！という感じですかね」と植田先生。なるほど、日本人は私も含め、歴史にロマンを感じる人が多そうです。だから、邪馬台国論争も忠臣蔵も、そして三国志なんかも人気があるのでしょうか。

さて、一首目の音読練習のあと、『越中懐古』の解説を聞きました。起句から意味を見てみましょう。越王勾踐が呉を破って帰国してきた。兵士達は皆錦にしきの衣ころもを身に付けて我が家に帰っていく。宮女たちは花のように宮殿に満ち溢れていたことだろう。しかし、今はかき消されたように何も無い。ただ鷓鴣しよこの群れが寂しげに飛んでいるだけだ。

越王勾踐は会稽の敗戦で受けた屈辱を忘れまいと、日々苦い獣の胆を嘗めながら耐え忍び、遂には呉王夫差を破ります。一、二句目では勝利に酔った戦士達の誇らしげな姿が目には浮かびますが、三句目では、呉王の後宮から連れて来た花のような宮女達がひしめく華やかな宮殿が見えてきます。戦いに勝つまでは、と禁欲的な生活に耐えてきた越王勾踐が、勝利のあと女性達を侍らせて羽目を外している姿が想像されます。しかし、その栄華を極めた王宮も今では鷓鴣しよこという鳥の群れが空しく飛んでいるだけの寂れた風景になっている、というものです。

「鷓鴣の鳴き声は、甲高くて耳ざわりがあまり良くないですよ。でも、鳴き終わって声が途切れた時にある種の寂寥感が残ります。『鷓鴣飛』という横笛の曲があるんですがね。恐らくこの詩がもとになっているのでしょうか。横笛の音も耳ざわりはあま

り良くないですが、音が途絶えた時に何とも言えない寂しさが漂いますね」と植田先生。鷓鴣と言えば、鶏と同じキジ科の鳥ですが、以前学んだ劉禹錫りゅううしやくの詩『踏歌』にも失恋の寂しさを連想する効果として使われていましたね。「華やかなりし昔も、今では全て儂くなってしまった。この詩は前の一首と同様、歴史ロマンに無常観という一種のニヒリズムが加わって、日本人の心を揺さぶるものがありますね。たった四句なのに、壮大な歴史ドラマを感じさせます」と植田先生。「臥薪嘗胆の〈臥薪〉は作り話かもしれませんが、〈嘗胆〉の方は、『史記』にもありますが、〈臥薪〉はないんですよ。ドラマ好きとしては、「臥薪」もあって欲しいですが、改めて想像してみると、薪の上に寝るなんて、王様にはありえなかったかもしれません。

色々お話を伺った後は、また音読練習をし、最後は質問の時間もありました。ある参加者の方から、「三句目の〈満春殿〉は平仄的には、〈春満殿〉の方が正しいですね。漢字をひっくり返しても意味は変わらないと思うのですが、どうでしょう？」という質問がありました。これには、植田先生も「確かにそうですね。私のミスプリントかと思いましたが、うーん、手元の資料も〈満春殿〉になっていますね。こればかりは李白さんに聞いてみないといけないかな？ 近いうちにね。」とまたまた植田先生のユーモアが炸裂して、今回の漢詩の時間も終わりにになりました。今回も濃厚な講座をありがとうございました！

## ■付記

### 〈満春殿〉の平仄配置について

この句の平仄は粘法の定則に従えば、6字目は仄声となるべきところだが、前後の字が何れも仄声なので、ここを仄声にすると下の3字がすべて仄声になってしまう。これは避けなければならないので、この場合「挟み平」の例外則で、真ん中の字は平声に変えてもよいことになっている。したがって「満春殿」は仄＋平＋仄となり、平仄的には問題ない。また、意味的には、もちろん春は季節を表わす言葉だが、ここでは女性たちの姿を花に譬えているので、「花のように美しい女性たちのいる宮殿」という意味で敢えて「春殿」という表現を使ったとも考えられる。